

国内交流学生制度 に参加して

—早稲田・同志社、フェリス女学院・同志社女子

橋本順子 (同志社大学文学部文化学科教育学専攻四年)

生井 俊 (早稲田大学第一文学部文学科英文学専修四年)

石川文伸 (同志社大学神学部二年)

國友佑子 (フェリス女学院大学文学部英文学科三年)

長元美季 (同志社女子大学学芸学部英語英文学科三年)

田中俊彦 (早稲田大学法学部二年)

司会 田端信廣 (同志社大学文学部教授)

(敬称略・ABC順)

田端 昨年スタートした早稲田大学と同志社大学の学部交流学生制度に続いて、今年には新たにフェリス女学院大学と同志社女子大学の交流制度がスタートしました。そこで本日は「国内交流学生」制度を利用して留学中の四人の方と、昨年一年間、この制度の第一期生として留学したお二人に集まっていたいただきました。母校をはなれ、学生の気質や大学を取りまく環境、そしておそらく課外活動のあり方などまでが違ふなかで気づいたこと、感じたことがあると思います。異文化環境の中で自分が何を得たのか、またこの

制度をどう発展させていけばよいかという提言など、みなさんの経験にもとづいた新鮮なお話を伺いたいと思います。

早速ですが、制度にアプライしてみようかと思った動機からお聞かせください。

生井 昨年、早稲田大学から同志社大学の英文学科へ来ました。僕が応募した年は、一期生ということでマスメディアに取り上げられることが多く、新聞でこの制度のことを知りました。記事を見つけたのは父だったんですが、父に「こういう制度があるぞ」と言われてどこか心に

響くものがあつたんです。一年くらい京都に行ってもいいかなという思いと、「一期」ということばにひかれてというもの潜在的にあつたと思います。僕は何でも新しいものが好きなんです(笑)。

橋本 私は同志社大学文学部文化学科の教育学専攻に所属しています。昨年早稲田の教育学部へ行きましたのは、早稲田には、希望する先生がいらっしゃったことと、教育学を「専攻」というところではなく、教育「学部」という大きなところで勉強したいという思いがありました。しかも東京は何といっても文化の中

心ですからね。一度はそんなところで学んでみたいと思っていましたから。

田中 私はこの制度を早稲田の先輩から聞いて知ったんです。サークルで「能」をやっていたので、本場京都で能の舞台となった場所を見て回ったりなどと、京都でいろんなものを学びたいというのがきっかけでした。

長元 同志社女子大学から今、フェリス女学院大学英文学科で学んでいます。私は英語についてもっと詳しく学びたいと思って同志社女子大学に入学したのですが、いざ入ってみて、何か自分のやりたかったことと違うなと感じてたんです。短大の友だちが就職活動をする姿を見て、自分も違う世界、他大学へ行けば自分の生活の中でやりたいことが見つかるかもしれないと思って応募しました。

國友 フェリスから同志社女子大学英文学科に來ています。私も長元さんと同じで、今までやってきたことに変化を求めていたんです。この制度のことが掲示板に出ていたのを友だちから聞いて、応募しました。応募用紙に理由を書く欄があったのですが、提出期日がせまっていた

時間がなく簡条書きに書き並べたので、面接で叱られてしまいました。ですから絶対落とされるとあきらめていたのですが、幸運にもこのようなチャンスをいただきました。志望の一番の理由は、人間生活学科科目を通して、何か将来、ためになるような内容が学べるのではないかと思います。

田端 面接で厳しいことを言うのは「この学生、いい線行ってるよな」ということが多い。見込みがあると思うから、きつく追及されたんじゃないかな(笑)。

石川 今年度、同志社の神学部から早稲田の一文社会学専修に行っています。大学生生活四年間のうち一年間を別の大学で過ごすことができるということ自体、相当な価値があります。それだけで十分応募の理由になります。同志社で神学を主攻にし、早稲田で学ぶ社会学を副専攻にしています。

田端 では留学してまず印象に残った経験や新鮮に映ったことを教えてください。

生井 同志社に來て最初のオリエンテーションの時のことです。私たち早稲田か

らの学生を前にして、教務部長の坂本完春先生は、話の冒頭にこのようなことをおっしゃったんです。

「皆さん、ようこそ同志社大学にお越し下さいました。本来ならば同志社大学へ來られた皆さんには、まず関西弁講座から始めないといけないのですが、今日は省略させていただきます。本当だったら御所で弁当を食べながら和気あいあいと話をしたかったです。」と(笑)。それで、関西の人って面白い、と思ってしまいました。

関西弁講座がなかったの、後で苦労しましたけど(笑)。

國友 私は京都というのは、周りが皆、舞子さんみたいにしてやべっていると思っていました(笑)。

長元 私も静岡出身なのでイントネーションが違います。京都に來たところは関西弁がやたらと耳にとび込んできて、とんでもないところに來てしまったと思いました。

國友 「何とかやん」となかなか言えないんですよ。ヒアリングはできて口にはまだ出せない(笑)。



田端信廣教授



生井 俊さん



橋本順子さん



田中俊彦さん

田端 福岡出身のある学生が私の講義を受けて「関西弁で哲学を語られるのは非常に新鮮な思いがしました」と言ったことがある（笑）。

田中 僕もこちらへ来て「僕、田中だけ」と言うと発音がおかしいと笑われたことがあります。

國友 関西弁での単語ひとつ取ってみても、東京弁と違い、英語のように最初にアクセントがつくのが面白いと思えました。

田端 ほとんどバイリンガルの世界ですね（笑）。校風とか大学の理念の違いより、実際は言葉の問題がファーストインプレッションとしては大きいんですね。

橋本 早稲田の方では最初、みんなが大会館館に集まって、総長と大隈庭園で撮

影会をしました。その時総長が言われたのは「早稲田は同志社と違ってジャンルみたいなところだ。ジャングルに飲み込まれないで、自分なりのオアシスを見つけない」ということ。早稲田にはゲタを履いたり、角帽をかぶったりして歩いている学生がいまさらね。このようなことは表層的なことなんですが、とにかく雑多な中でがんばって、飲み込まれないようにしっかりしなきゃと思えました。

石川 同志社では、落ちついてものを考えることができる良さがありました。早稲田にいくと、「早稲田界限」という大学を中心にして出来上がっている街があって、学生の活気が「地域」とともにあるという印象を持ちました。大学の中でも

学生たちは自分で本当にやりたいことをやっている。そのためには授業に出ないこともあるし、留年だって気にしない。卒業できなくてもいいみたいところさえ見つけられます。

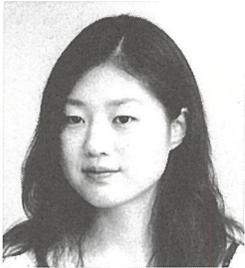
橋本 早稲田では「俺たちの大学」というのを感じましたね。

田端 俺たちが好きなことをやる場が「大学」と呼ばれているだけだと。大学があつて俺たちがいるのではなくて、俺たちが好きなことをやる場を、世間ではたまたま大学と呼んでいるという感覚ですね。

橋本 同志社のキャンパスはきれいでいいのですが、その分早稲田に比べると、何かにつけて管理されている中に通ってくるという感じがしますね。



長元美季さん



國友佑子さん



石川文伸さん

生井 僕たちが入学した時は、「ジャングル」ではなく「砂漠」と呼んでいたんですよ。砂漠って表面上何もなければ穴を掘れば下に水があるわけです。そういう井戸を自分たちで掘って見つけられるか見つけられないかで、大学生活は変わるのではないかという話を総長がされました。早稲田の場合、やろうと思っただけでも用意されている。そういう環境は整っているという意味で自由度が高い。いい加減さがあるというか。

長元 同志社女子大学のカリキュラムは必須科目の場合、内容の選択はできても、その時間とクラスは一方的に大学から指定される為、時間割の制約を受けるんですね。ところがフェリスではそれがなくて、受けた授業を自由に選んで、時間割を

作れることが一番うれしいですね。

石川 僕が早稲田で受けた授業は、みんないい授業だったと思うんです。学生たちで作った授業評価があつて、それに基づいて授業をとっていききました。違う学部に出かけていったこともありまして。新たな視野が広がるような経験をしました。

田端 ほかにも授業の進め方やスタイル、学生の意識の違いを感じますか？

田中 同志社の授業に出て、賑やかだなと思いました。

橋本 早稲田は静かでしたね。

田中 早稲田は授業を聴きたくない人は受けませんから。

橋本 授業をちゃんと聴きたい人が来ている。静かでした。

田端 同志社は聴きたいと思わなくても授業に行かねばならないという縛りがかかっているのかな。

フェリスと同志社女子大との違いはどうですか？

國友 授業の違いはほとんどないですね。

ただフェリスは派手なんです。同女も同じ女子大ですが、フェリスの目から見ると地味で、服装は楽でした。

生井 早稲田はもっと恰好を気にしない。

橋本 早稲田では草履とかで通ってたんですよ。設備面で言うと同志社の設備はいいなと思わざるを得ないですね。教育学部だけでもいいんですが、早稲田は長机に長椅子で公民館の机みたいで、学

問の基本の場でお金がかかっていない。
生井 背もたれのない椅子はつらいです
ね(笑)。長椅子が置いてあるだけで。

橋本 同志社はすばらしい。

田端 でもそういう椅子に座ると学問の
あたりがたみがじんわりとわかる(笑)。

橋本 冷房がきかない教室もあって、テ
ストの日、先生が「今日は暑いから二問
出すところを、一問にします」(笑)。理
工学部では「契約している電気量を上回
っています」とアナウンスがあつて、廊
下の電気がパチパチと消えたりして
(笑)。

田端 では、学生の気質はどうですか。
生井 早稲田の学生は時間にルーズです
ね。なぜかという、たいていの講義は
授業の時間から遅れてスタートするん
です。それで同志社でも最初、その感覚
で授業にいつてみると、先生がもう来
てらんです。早稲田では先生が十分遅
れてきておまけに終わるのまで早い先
生もいます。九十分授業でも実際は八
十分です。先生によつては六十分の先
生もいて、これこそ大学だと僕は思
つてたんです(笑)。それに、早稲田は
チャイムが鳴ら

ないんですよ。同志社に来てびっくり
しました。

田端 チャイムが鳴るのは抵抗感がある
と言いますね。

生井 そういう意味では皆、真面目です
よね。そして関西の人つて人なつこ
いと思う。クラスに見慣れない人が
いるとすぐに声をかけて、「どうしたの?」「早
稲田から来たんです」と。最初から
クラスに溶け込める。そのへんが関
西のよさです。

橋本 私は逆に早稲田の人たちは自
分の知らない人たちでも「早稲田」
というだけで肩を組めると思いま
した。というのは、私は登録した全
ての授業に友だちができたんです。
早稲田、東京というのもあるかも
しれないけど、来た人を受け入れ
る。同志社は排他的な要素があつ
たかな。私は早稲田で歓迎を受け
て、同志社にいつている人たちは
どうだろうと思つた。どうでしたか?
生井 最初友だちがいなくて苦労
したんです。早稲田に留学した同
志社の人は「同早会」という会を
作つて定期的に集まつていたん
ですよ。

でも早稲田の人間は個性が強すぎて
個人プレーに走つてしまふ。集まる
ことができないんですよ。お互いに
最初、友だちがいなくて苦労してい
るけど、それぞれの道を歩んでい
て。一人は奈良あたりで穴を掘つ
たり、前期テストの頃に、この授
業一緒に取つてたんだと気がつい
たこともあつた。同志社のまとま
つてやるという姿勢は羨ましく思
いました。

石川 入学式の時に奥島総長が、「混
沌としたキャンパスの中に文化コ
ミュニケーションを体得するよう
に」と話されました。そういう
いろんな人がいる中で揉まれて、
異質の分子を飲み込んで、一緒に
やつていけるようなことに慣れ
ていく、そういう力が早稲田の学
生にあるのではないかと思いま
す。

田端 これまで、いろいろな経験談を
語つてもらいましたが、自分の学問
にとつて、学生生活全体にとつて、
人生全体にとつてどういう意味を
持ったのか。マイナス面も含めて
自由にお話してください。田中 一
番よかったのは新たな人間関係
が生まれたことです。僕の場合は、特
に

所属したサークルの中でいろんな人との出会いがありました。

石川 早稲田はサークル活動が外の世界とつながっているように思います。たとえば放送研究会だったらNHKからアルバイトの要請がくるといった具合にサークル単位に企業とのつながりがあつてそれが社会経験につながっていく。社会へ飛び出していく前段階がサークル活動の中にある。そういう大学もあるんだなど新鮮に感じました。

橋本 私は一期生ということで同志社を背負つてというプレッシャーがあつたんです。でも、「同志社のために何ができるか」というよりは、すべて私のために、自分のためにやろうと思えました。ゼミでは学年を越えた友だちができたし、クラブに入って剣道も頑張れた。明治大学の人も友だちになれて、そういう人脈は就職活動でも生かされたし、人とのつながりは十年後、二十年後にも消えないものだと思うんです。

早稲田で同志社のことを聞かれるからと、行く前に集まって、同志社の歴史を勉強しました。同志社の精神、歴史、考

え方やキリスト教精神とか、同志社のことを知るきっかけにもなった。知らないまま卒業していく人もいっぱいいるけれど、早稲田に行つたから同志社のことが見えたということもあります。

田端 総じて、自分が何であるかは、他者との関係を通してしかわからない。フリスであれ同女であれ、早稲田であれ同志社であれ、「そうでないもの」を一度くぐり抜けることによつて初めて、同志社とは何か、自分とは何かということがよくわかつてくる。そういう機会をこの制度は与えてくれる。それに同志社がどうだったか、早稲田がどうかということよりも、自分にとつてどうだったかということは大切だと思います。

それでは次に、この制度をどうしていくか。まだ一期生と二期生ですが、後輩に向かつて、双方の大学に向けて、また社会に向かつて、君たちしか言えないことをアピールしてください。これについてこうしてほしいという提案、是正してほしいこと、募集人数、期間の問題とか強く思っていることから出して下さい。

田中 応募をやめようかと迷つた理由に

単位の問題があります。今年早稲田にいれば取得できるのは四十二単位ですが、同志社で認定してもらえないのは三十単位です。十二単位の分をどうしようかと思ひました。

田端 単位制限がきつすぎる？

橋本 五年計画でいつている人もいますけど。

石川 単位のことに限らず、どういう制約があつたとしても最終的にそれを克服するのは本人が持つているビジョンとか、その制度を活用できる個人の能力に関係してくると思うんです。中には「この制度は自分には合わない」と言っている留学生もいます。しかし、この制度をよく理解して、自分の計画の中に上手に組み込むことができる力のある人だけが行くべきだと思います。選抜されていくということは、行きたくても行けない人がいるわけですから、それを有効に活用できなければなりません。行けたら行ってみようという安易な気持ちではなく、その制度を活用して自分が何を行いたいのかビジョンを明確にしてから行くといいのではないのでしょうか。

橋本 来年はもう三回目です。看板は出ていますが、それは単に「募集」の要項案内だけ。この制度はこういうものだというところをもっと知らせるべきだと思います。

田端 学生への広報が徹底していない。

長元 想像していたことと違うこともあるので、きちんと紹介してほしい。

橋本 私の時は何を聞いても、一期末だからまだわからないと言われました。私たちが帰ってきてホームページを作っていますから、これから応募する人は是非参考にしてほしいと思います。

生井 確かに僕たちがいた時は僕のためにこの制度がある、僕が京都を知るためにある、という「自分」というのが大きかったんですけど、一年たって終わったら、やはり大学に還元しないといけないなと思いました。客寄せパンダになっていろんなことを言ってみたり、広報活動をしなないといけないと思って、今年僕は広報をしようと思っています。その一環として早稲田で説明会をやり、同志社から早稲田に来てくれるように看板やパンフレットを作ったり、去年行ったメンバーと

今年来てくれている四人をパネラーにして、制度、家の問題、費用などの話をする機会を作りました。

田端 それはどこの主催で？

生井 教務課です。一期目はマスメディアに取り上げられたので応募者数が多かったですけど、二期目は落ち込んだ。とりあえずは応募しておこうという気持ちで受けた人が、最終的に「サークルで責任のある立場になるので行けない」と言って辞退する。僕から言えばそんな理由にならない。僕らの時は情報もなかった。おまけに「理工学部とか政治経済学部がゼロだったら文学部に枠が回ってくるかもしれない、生井君はその時に行ってくれ」といわれて。一月の正式決定までわからなかったんですよ。

橋本 私たちも何回もアンケートをとられ、文章を書かされました。早稲田からも同志社からも書かされて。

長元 女子大はゼミが二、三年と続いています。ですから二年で行くとゼミも中途半端にならないし、就職のことも心配しなくていい。

橋本 行く前に単位の確約をとっていい

るといいのですが。これとこれはとってきますから、帰ってきたらこれは振り替えてもらえますねと最初に確認してから。

生井 ゼミを演習に振り替えようと思つたら、内容が演習にないから専門講義として認定します」と言われて。単位の認定は学部間で差が出ましたね。

田端 フェリスはセメスター制というところで、半年という期間は駆け抜けた、というより瞬間という感じでしょうか？

國友 単位のことを考えると半年期が妥当だと思います。「もう半期いらつしやいよ」と言っただけさる先生もいますが、今回二十八単位の授業を取ってしまったているので、そうすると、もう残り二単位しか認めてもらえないんです。

田端 一応、単位を確保してから枠をはみ出したものをやりたいのかな。

國友 私は今、向島の学生センターに住んでいるのですが、テレビと炊飯器以外の家電は全て最初からそろっていたので、とても嬉しかったです。一年だけ一人暮らしをするために家電とか揃えるのはどうですか。

橋本 都内には家具つきの学生会館がありました。

生井 民間で一年間住むのは最初の初期費用が三十〜三十五万円くらいあります。早稲田は学生寮が男子しかないのですが、その男子も希望者全員が入れないのが現状です。同志社から行く人のために借りとして引き継ぎをするとか。

石川 学生生活課で早稲田の寮に入れないかとお願いをしたら、「早稲田の学生で一年生からでないといけません」と断られました。それで学生生活課で一番安い二万二千円のところを紹介してもらいました。

橋本 早稲田の生活課は親切で、大家さんがいいところを教えてもらって決めました。

田端 家具や家電の問題については大学の厚生課が関与するか、ボランティアでうまくバトンタッチするネットワークを作ったというのを自発的にやる必要があるようです。

最後に、後に続く人たちに「これだけは言っておきたい」というメッセージを一言ずつ。

石川 得られることの大きさを考えるとお金がないということで交流制度を諦めないでほしいと思います。現に僕は同志社、早稲田の中で一番お金のない学生だと思っています。事実奨学金づけです。

同志社奨学金と貸与奨学金と育英会の奨学金をもらって親から一円ももらってないし、学費も生活費も自分で賄っています。そういう人間がいるわけですから行きたいという気持ちのある人は、お金のことで諦めないでください。

長元 大学生活の中で本当に心に残ることだと思えます。まだ三カ月くらいですが、得ることはたくさんありました。行く前は、帰ってきてからのこととか、就職のこととか頭を駆けめぐって不安でしたけど、その分自分に返ってくるものは多くあるので、是非経験してほしいです。

田中 単位の問題もありましたが、これから行くかと思っている人はこの制度を通してできるプラスの面を見て応募してほしいと思います。

國友 二つの大学を経験できるのは貴重な体験だと思います。いいことの方がはるかに多いし、楽しい経験もあるので応募してほしいと思います。

募してほしいと思います。

生井 春、夏、秋と、京都には東京とまた違う独特な四季があつて、五月、六月には新緑、秋になると紅葉狩りにいこうかとか。二月終わりの交流会の日は春の匂いがする日で、あぁ一巡りしたんだなという感じがした。四季のうつろいを感じられる人間になったことだけでもよかったと思っています。

橋本 これと同じ一年かと思うくらい充実した一年間でしたが、これから自分の中でこの経験が大きくなっていくと思います。何年も先が楽しみです。

田端 今日試験中のお忙しい中を集まっていただけで、有益な話を聞かせていただきました。後輩のためにネットワーク、少しでも次の交流学生が快適になるように、ご協力をお願いします。ありがとうございました。

(一九九八年七月一日)

ハリス理化学館にて収録)